



いっしょに歩こう！ プロジェクト

日本聖公会東日本大震災被災者支援

News Letter

第20号

2013年5月1日発行



▲ 釜石被災者支援センターに集う



▲ 仮設住宅の談話室プログラムのひとごま



▲ 上中島仮設住宅にて



▲ ほっこりカフェは仮設住宅の方々に引き継がれた。
写真は聖公会のスタッフ、ボランティアと。



▲ 我が家に帰りたくても、放射能汚染地帯のため
帰れない



▼ 警戒区域の富岡町内をかつ歩
するダチョウ



現在の「いっしょに歩こう！プロジェクト」は、2011年5月からスタートし、当初から2年間の活動目標を持っていました。2年経って、今後の日本聖公会としての取り組みはどうなっていくのか、この間、プロジェクトでも検討を重ねてきました。そしてこれまでの2年間の取り組みをそのまま延長するのではなく、ある意味で「ギアチェンジ」をしながら「いっしょに歩き」続けていきたいと、「パートⅡ」に向けての構想を固めてきました。

いっしょに歩こう！ パートⅡに向けて

釜石・小名浜 ベースから見たこと

- ✎ 海老原祐治
(釜石被災者支援センター センター長)
- ✎ 宮田裕三
(小名浜聖テモテ・ボランティアセンター 事務局長補佐)

いっしょに歩こう!パートⅡに向けて

— 東北教区の歩みと、「放射能、原発、ふくしま」のこと —

現在の「いっしょに歩こう!プロジェクト」は2013年5月末をもって終了し、その後「いっしょに歩こう!パートⅡ」へと移行していきます。ここでは大きく分けて以下の2つを柱として活動を行います。

◆「いっしょに歩こう!東北」(仮称)

1つは東北教区としての歩みです。「いっしょに歩こう!東北」(仮称)として、1つの拠点としては「センターしんち」の活動を継続し、さらに必要な働きを続けていきます。東北教区の出来る仕方で、出来るだけ地域にある教会に根ざしながら、地道でも継続可能な仕方で祈り働いていくことを目指します。専任のスタッフも置き、被災地への訪問や巡礼、祈りの機会も広げていきたいと願っています。

◆「原発と放射能に関する特別問題プロジェクト」

もう1つは2012年の総会決議である「原発のない世界を求めて」の声明に基づきながら、原子力発電、放射能に関するわたしたちの認識を深め、現在の「ふくしま」の状況を広く世界に発信するとともに、現実苦しむ被災者の方々に寄り添おうとする働きです。

子どもたちのリフレッシュ・プログラムやその他の支援活動が考えられます。すでにある「原発と放射能に関する特別問題プロジェクト」と、これまでも小名浜他福島県内の教会を拠点に取り組みされてきた被災者支援の働き、その両面を含んで、改めて日本聖公会としての大きな取り組みとなることが目指されています。

「いっしょに歩こう!プロジェクト」は6月から9月にかけて残務整理等、段階的に終了作業を行っていきます。また釜石の「被災者支援センター」は開所から2年、3度目の夏を迎える8月末まで従来通り活動します。その他、詳しいことは次号ニュースレター等を通して、今後お伝えしていきますので、どうぞよろしくお覚えください。
[本部長 主教 加藤博道(東北教区)]

● 釜石 小名浜 ベースから見えたこと ●

福島県いわき市小名浜では「小名浜聖テモテ・ボランティアセンター」として、岩手県釜石市では「釜石被災者支援センター」として、それぞれ2011年5月と8月にベースが開設され、地域に根差した活動が継続されてきました。釜石ベースは釜石市内の十数ヵ所の仮設住宅とのつながりができ、体操プログラムや、お料理会などの支援活動に取り組んできました。小名浜ベースが繋がってきた仮設住宅には、東京電力福島第一原子力発電所から20km圏内に位置する福島県大熊町・富岡町から避難を余儀なくされた方々が生活しています。各ベースにおいて、地域の方々、スタッフ、ボランティアとの間で築いてきた関係とはどんなものなのでしょう。

釜石

希望という名の支援

海老原 祐治

(釜石被災者支援センター センター長)

大震災から2年が経過しましたが、まだ被災地釜石では復興は進んでいません。復興をはじめの準備をしている段階です。被災者は2年が過ぎ去ったいまでも先行きの見えない不安を抱え、様々なストレスを受けながらの生活を余儀なくされているのが被災者の現状なのです。そんな

被災者の方々が求めているのが希望です。

希望といってもさまざまですが、我々のような小さな支援団体も小さな希望を提供することができます。小さな希望を灯し続けることが我々の1年7か月の仕事だったといえると思います。例えば仮設住宅談話室で行うプログラムがあります。毎週あるいは隔週の定期で入っている仮設が5か所、不定期で月1回程度のプログラム開催で入る仮設が10か所、これらの仮設の方々は我々の活動を楽しみに待ち、ボランティアや住民同士の交流を深めることで支え合っていることを実感します。決して自分一人ではない、周りには仲間がいて、いまなお自分たちを憶えて支えようとしてくれるボランティアがいるということを実感を持って感じることができるのです。その積み重ねが小さな希望に育っていきます。また我々のプログラムでは共同で作業をすることを大事にプログラム構成しています。住民同士が共同で何かをすること、ボランテ

ィアと共同で何かをすることが絆を育み、ささやかな希望になってきています。それがコミュニティーの土台になるのです。

大震災が起きて、津波に襲われても、その人がその人らしく生きていくことをお手伝いすることが我々の支援の本質です。また現代福祉の根幹でもあります。地域に自分たちのために働いてくれる人たちがいること、いまのセンターのように自由に訪れることのできる場所があること、被災した街で芽生えた新たな価値が教会の働きとして続くことを願っています。また教会の働きが人と人とを媒介することを期待しています。



「喪失」、事実としての喪失体験があると、時間と共に次の段階へと歩み始められる。「楽しい我が家」「楽しい我が町」「楽しい時」そのすべてが3月11日のままに止まっている福島県大熊町・富岡町。

「喪失」をしていないのに、一方的に喪失を迫られている人たちと共に、この2年間を歩んできた。田舎の大きな家に住んでいたのに、ひとり暮らしという理由で四畳半一間のプレハブに住んでいる。我が家に帰ることも許されず、帰っても我が家には土足で上がるしかない。2年ものあいだ放置されている町と家は、日々朽ちていくだけで、人が住める状態には戻らない。戻らないどころかバリケードで囲まれてしまった家もある。夢や希望を持つことすら叶わない今を生きる方々がいまだに数万人という数に上る。

小名浜聖テモテ・ボランティアセンターは基本的に「何もしない」ボランティアセンターとして活動してきた。「物を配らない」「戸別訪問をしない」「イベントを企画しない」「布教をしない」ただ寄り添う事だけを旨とする働きは、お互いの関係を対等に保ち、お互いがもたれ合うこと無く、支え合う関係へと発展した。

3月11日のまま時が止まっている被災者と、ゆっくりと進んでいる周辺地域、そして猛烈なスピードで時が進んでいる都市をはじめとする全国各地。大熊町は30年、富岡町は5年以上帰宅困難地域として帰ることが出来ない。

彼らを棄民にすることなく、築きあげられてきた信頼と友情関係をこれからも保ちながら、神の名のもとに建てられた小名浜聖テモテ教会のミッションとして、放射能災害の渦中にある方々と、また、同じ放射能災害の渦中にある教会として、出来る事は限られているが、共に喜び共に泣く者として互いに支え合う関係をいつまでも続けていきたいと考えている。

小名浜

喜ぶ者と共に喜び、
泣く者と共に泣きなさい

宮田 裕三

(小名浜聖テモテ・ボランティアセンター事務局長補佐)

walknow!
いま どこを歩いているの?

プロジェクトが、どこを、誰と歩いているのか知ってほしい!
これまでご紹介したプログラムのその後など、現在の活動の様子をお伝えします。

■外国人代表者会

2013年1月26～27日、これまでに外国籍被災者の支援活動で出会ってきた各コミュニティーの代表者を仙台に招き、代表者会を行いました。集まったのは、日本人の家庭に嫁ぎ地域の一員として地域社会に根ざした生活をしている女性たちです。会は一人一人の個人史を紐解くことから始まり、それぞれが抱えている課題を共有し、現状を変えるために自分たちには何が出来るかを、ワークショップを通して分かち合いました。

そこで出された課題の一部を紹介します。

- ・離婚届、母子家庭手当、児童手当などの手続きが困難。
- ・言葉の問題で労働契約について十分に理解ができなかったため、雇用や労働に関する問題の相談会を開催してほしい。
- ・震災により友人や近所だった人が離散し、仮設住宅で新しい人間関係を築くことがなかなか出

来ず、部屋に閉じこもってしまう。

- ・各地域に移住民センターを作りたい。そこに住む外国人同士協力し合い、復興への道のりを共に歩んでいきたい。

代表者会の開催をきっかけに、岩手県に住む参加者たちがプロジェクトの外国人被災者支援の担当者と共に、岩手県国際交流協会を訪問し、今後の県の支援体制について相談することができました。語学教室の会場提供など、彼女たちからの希望に沿って県からも各市町村へサポート要請ができる、といった具体的なアイディアも出されました。困難を抱えている外国人自身と自治体との橋渡しが出来たことは大きな成果です。

プロジェクトでは代表者会で共有した意見も盛り込んだ「政策提言」を作成中です。これが用いられ、岩手県以外の自治体においても多民族共生社会への取り組みに外国人自身が関わっていくことを願っています。



■落成式と起工式

地震により建物が傷み、建て替え工事を行っていた幼稚園と保育園の園舎が完成しました。



福島県会津若松市の若松諸聖徒教会附属若松聖愛幼稚園では、東北教区信徒、卒園児、町内会の方々など120名が集まり、3月20日に落成式と記念礼拝を捧げました。新園舎のホールはしばらくの間、若松諸聖徒教会の礼拝堂としても機能します。(写真①) 岩手県釜石市の釜石神愛幼児学園は昨年7月から仮園舎での保育を行ってきましたが、今年度は床もピカピカの真新しい園舎で新学期がスタートしました。(写真②) 4月6日に行われた落成式では新しい園歌も披露され、子どもたちの歌声が響きました。



また、4月1日には地震によって使用禁止となり昨年解体された仙台基督教会・主教座聖堂の起工式が行われました。天候に恵まれ、信徒、工事関係者が共に工事の安全を祈りました。(写真③)



■石巻市（宮城県）／外国人被災者のためのホームヘルパー資格取得講座（最終回）

南三陸町、気仙沼市に続き3回目のホームヘルパー2級資格取得講座が石巻市で開講されています。今回も三幸福祉カレッジの協力を得て、フィリピン、インドネシア、中国国籍の6名の受講生が日本語の専門用語の勉強、ベッドを用いた実技などのステップを踏みながら資格取得を目指しています。中には車で二時間近くかかる距離を通う方もいます。この講座は震災によって仕事を失った外国人たちの「自分や家族の将来のために自立・安定した生活を送りたい」という声を聞いて計画されました。開講日には受講生の子どもたちのための託児も行います。4月末に修了予定です。

いっしょに歩こう!プロジェクトの2年 感謝と祈り 聖餐式

日時: 2013年5月25日(土)午前10時
場所: 仙台基督教会・東北教区主教座聖堂仮礼拝所
(仙台市青葉区春日町7-32 パセオビル2階)
司式: 主教 ナタナエル 植松 誠
(いっしょに歩こう!プロジェクト代表、日本聖公会首席主教)
説教: 司祭 ペテロ 大町信也
(いっしょに歩こう!プロジェクト運営委員会委員長、北海道教区)

活動記録 (3/6~4/5)

仮設支援

- 工作を楽しむ会／小佐野仮設（釜石市）
 - お料理会／向定内仮設（釜石市）
 - 談話室プログラム／向定内仮設、野田仮設（釜石市）
 - じゃがいも配布／松倉仮設（釜石市）
 - かるた作りを楽しむ会／上中島仮設（釜石市）
 - ▲ 買い物バスツアー／箱塚桜団地（名取市）
 - ◆ ほっとコーナー（お茶会）／雁小屋仮設など（新地町）
 - ◆ ほっとシネマ／広畑仮設など（新地町）
 - ◆ ほっこりカフェ／泉玉露仮設、渡辺町昼野仮設いわき市
- その他にも…指圧マッサージ、子どもプログラム、アフター5プログラム、ネイルサロン など

外国人支援

- ▲ ホームヘルパー2級資格取得講座／石巻市
- ▲ 個別支援（子ども学習支援、刊行物の解説、職業安定所などへの付添い、他）／石巻市、多賀城市、仙台市

- ▲ 日本語教室、英語講師啓発セッション／仙台市
- ▲ 外国人被災者の東日本大震災2周年記念礼拝／仙台市

障がい者支援

- ▲ 訪問／仙台市（まどか）
- ▲ 作業補助など／気仙沼市（ひまわり）

その他

- ★ 台湾聖公会^{ライオンズ}頼榮信主教一行被災地訪問／岩手、宮城、福島県各所
- ◆ 幼稚園手伝い／福島県内複数幼稚園
- ★ 各地からの来訪者、ボランティアと共に被災地巡礼／宮城県、新地町など

- 岩手県 ▲ 宮城県 ◆ 福島県 ★ その他、複数県における活動を示します。紙面の都合上、掲載されていない活動もあります。詳細は各ベースのブログをご覧ください。

【ホームページ】: <http://www.nskk.org/walk/>



いっしょに歩こう!プロジェクトニュースレター第20号 2013年5月1日発行

「いっしょに歩こう!プロジェクト」事務局 **OPEN** 月～金 10:00～17:00 **CLOSE** 土・日・祝

〒980-0803 宮城県仙台市青葉区国分町3-4-5 クライスビル2F TEL:022-265-5221 FAX:022-748-5321

E-mail: walk@nskk.org ホームページ: <http://www.nskk.org/walk/>

献金をお捧げ頂く場合はこちらの口座へお願いいたします: ゆうちょ銀行 00120-0-78536 (加入者名 日本聖公会)